



2018年12月
第684号

日本基督教団 平塚教会
発行人 平塚 教会
編集人 中山 洋 司
〒254-0045 平塚市見附町6-18
電話 〇四六三(32)八八三一



「霊的対話と信仰の継承」

平塚教会牧師 北川 一明

二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。

(マタイ福音書第一八章20節)

キリスト教は二〇〇〇年間クリスマススを祝ってきました。二〇〇〇年の永きに亘って信仰を継承できたのです。神の助けがあれば、世から信仰が失せることはありません。

けれどもパウロが命がけて伝道したガラテヤやエフェソでは、キリスト教信仰は滅んでしまいました。一時はキリスト教の中心地だったコンスタンチノポリスやニカイアにも、今は信仰が残っていません。人間が残したい教会が残るわけではありません。

現代の日本でも、一九八〇年以降、多くの教会が信仰の継承に失敗しました。平塚教会は、信仰を次世代に継承する教会でありたいと願っています。本号は前号の続きです。

日本では、一九八〇年ころまでは信仰が継承されてきました。

その頃の教会は、説教者が聖書を正しく説き明かせば信徒の信仰は養われていたようです。

難しい教理の話聞いた日、信徒は信徒同士でどう理解すべきかを話し合いました。すると、教理が具体的な生活の中で受け取られることになります。キリスト教が、自分の生き方や仕事と関係してきたのです。信徒同士の信仰の対話のおかげです。

教区や地区の婦人会の交わりには、今もその傾向が残っているようです。しかし今や、世の中は難しい話は聞き流される時代になりました。理解できなかった話を心に留めてじっくり考える時間がなくなったのでしょうか。

神学校で教える説教は、こうした時代の変化に対応していません。

そこで教会の現場で試行錯誤が続いています。説教が聖書の解説であってはならないと言われるようになりました。そして「イメージとして物語る」とか「聴き手の想像力を喚起する」とか、色々なことが言われています。

目次

「霊的対話と信仰の継承」

北川一明牧師… 1

年齢百歳と信仰百年の恵

生い立ちの記

中村 義… 3

各部探訪

コーヒータイムについて

鈴木 勝… 3

編集後祈

… 4

分かり易ければ聴き手には喜ばれます。聞き易い説教も生まれました。

ただ、説教が分かり易くなっても、それだけでは信仰の継承にはなっていないようです。頭で理解しただけでは、信仰は生き方までではならないからです。

信仰は信仰者を導き、助け、善く生きるようにさせます。そうした信仰を養うには、頭で理解した教説を、自分の魂に必要なものとして受け取り直すことがどうしても必要です。

頭で理解したキリスト教を自分の魂に落とし込むことは、他人がやらせることは出来ません。一九八〇年代まで、教会には信仰の対話がありました。信徒の交わりによって、会員は自身の信仰を養いました。

今の教会は、そうした対話が難しくなっているのでしょうか。

教会は「仲良し倶楽部ではない」「高級サロンではない」と言われて来ました。その通りだと思います。

教会での「信徒の」交わりが全て「信仰の」交わりになるとは限りません。信徒同士が「俗悪で愚にもつかない」(テモテへの手紙Ⅰ・四

章6節)「無駄話をするのは問題です。信仰を養うどころか信仰を萎えさせます。」

対話と言っても、自分のことを分かってもらおうとしては、なかなか霊的な話まで進みません。「聞くのに早く、話すのに遅く(ヤコブ書一章)」と書いてある通りです。

霊的対話は、実際には吐露ではなく質問になるのだと思います。

己の口をつぐんで、まず相手に関心を注ぎます。相手が神に愛されている者であることを大前提に聞きます。そして相手の話しを超越との関係で考えます。すると神の恵みのなんとるかに気が付きます。

神の恵みに気付けば、それを自分に当てはめることが出来ます。自分の思いを中心に話しては、神に気付くことが出来なくなります。

かく言う私も、信仰の継承には苦勞しています。

二人の子どもは、教会に通ってはいません。キリスト教をある程度は理解し、そこそこ「良い物」と思っているようです。しかし堅くて篤い信仰を持ったわけではありません。

「キリスト教は善い物のようだから好きです」という程度では、危機に瀕した時には何

の助けにもなりません。

子どもらには、心を開いて魂の底から思いを打ち明け合う友だちや恋人が、いないわけではありません。でも教会の中にはいません。

教会の中では、ただキリスト教的な挨拶を交わし合う程度です。教会の外では友だちの深い話を聞くこともあります。しかし信仰的に解釈することには慣れていません。

キリストの名による対話をする場がないのです。

心ある教会人が「教会を仲良し倶楽部にしてはならない」と言ったのは、霊的な深い対話を期待したからです。

ところが現代では、教会生活が個人化しました。「仲良し」を否定することで、深い交わりがなくなってしまうのでしょうか。

メソジストの伝統である「組会」を復活させたいです。昔の組会は、地域で集まってきました。今はライフスタイルの近い人で集まると良いと思います。

集まり易い人で集まると、組会が「仲良し」で終わる危険があるでしょうか。しかし仲が悪いよりも仲が良いほうがずっと良いです。

殻を閉じたままの個人が話をしていても、信仰を深める話にはなりません。

各部探訪

コーヒータイムについて

係 鈴木洋子 足立弘子 川島咲子
中村幸子 倉持啓子 鈴木 勝



係とお手伝いをして下さっている方々

互いに交流を深めたいとの思い、コーヒーを飲みながら、楽しい時間を過ごせることができたらとの思いで、コーヒータイムが始まりました。

はじめは、インスタントコーヒーでしたが、西田牧師がアメリカ土産に、コーヒー沸かしを買ってきてくださり、それから本格的に美味しいコーヒーを出すことができました。

そして初めは代金をいただきましたが、教会会計から費用を出していただき、無料になり、人気もよく飲んでいただく人が多くなり、会話も弾み、とても良い交わりの時を持つことができました。コーヒーの粉やお菓子の差し入れがあり喜んでおります。働き手を募集しています。よろしく。

(文責 鈴木 勝)

コーヒータイムは、毎月第二週と第四週に一階多目的ホールで行われています。12月の第二週に訪れてみました。

ホールの入り口には、

コーヒータイム
やっています

ほっと一息
楽しいおしゃべり
タイムをどうぞ

と書かれた案内板がおかれています。

テーブルの上には、お花が飾られ、「亀田のまかり」と「不二家ホームパイ」(コストコで購入かな?)のお菓子が、たくさん菓子皿に盛られています。係の皆様のお心遣いを感じました。

今日のお客様は、20名ほど。昼食を共にしている人、パパやママとお茶をしながら話している子どもたち。係の方が、「コーヒーにしますか?」「お砂糖はいかがですか?」

と声をかけながら、年長のお方と談笑している光景も目につきました。コーヒーがダメな方には、紅茶も用意されています。

ほっと一息、楽しいおしゃべりタイムを皆さんもいかがですか。

年齢百歳と信仰百年の恵み

生い立ちの記

中村 義

今年百歳になりました。一九一八(大正七)年四月二四日が誕生日です。教会住所録の最後のページにある受洗日記録表では、今年のクリスマスには、信仰百年になります。

年齢が百歳で、信仰百年と聞くと、おかしいなと思われれますね。私は8ヶ月で幼児洗礼を受けています。教団の規則では、信仰告白

と満たされない思いを解消したい気持ち、お

式を経なければ、教会員となれないのですが、これには訳があります。

戦後、北朝鮮からの引き揚げ、日本国内での点々とした仮住まい、新潟から平塚定住までの長い過程で、そのような教団の規則の知識も、制度の気付きも無く、「クリスチャン」だと思ひ込んだ生活の中で、正式な手続きを行うチャンスを逃したというのが実際の理由です。

私の母、福島ミヨノは、15歳の時に家族と共に北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）に渡ったメソジスト系教会の熱心なクリスチャンでした。牧師の路傍伝道の手伝いをしたり、自ら街頭で語ることも厭わない程の、熱心さで生きてきた人でした。私が生れて、生後8ヶ月の時のクリスマスに、関田寅之助牧師から幼児洗礼を受けました。この方は現在の関田寛雄牧師のお父さんです。

兄弟は姉が四人、弟が三人いましたが、既に皆召天しています。兄弟で私だけが一〇〇歳まで生きました。父の願いでは、今度、男子が生れたら「義」と名付けようと用意していた名前が、女の子の私にそのままついて役場に届けられました。母の影響は強く、私も教会に連なることを生活の一部として違和感もなく続いておりました。

今考えると「義」という字は、読み方によっては、「羊は、我」、「我は、羊」とも読めます。誰の羊だったのか、飼い主は誰だったのか、今さらながら、名前と教会との繋がりに

運命的なものを感じています。

北朝鮮からの引き揚げは、一九四八（昭和23）年です。舞鶴から島根県で数ヶ月を過ぎた後、今の新潟市街から離れた古津という母方の叔母の家で、半年居候した後、新潟市に移り住みました。今のような正規の流れには乗らずに新潟教会に籍を得た経過は、よく分りません。兎に角、幼児洗礼をクリスマススの時に関田寅之助牧師から受けたという手許の記録と記憶から、新潟教会に会員としての席ができました。それから約20年を経て、夫中村一誠の転勤と共に一九六六年八月に平塚教会（当時、棟方功牧師）に転会しました。その後、信仰告白式が無かったことに岡本不二夫牧師の指摘があり相談した結果、「既に長年の教会につらなつた生活があり、引揚げの前後や、転々とした時代にも教会からも離れずに経過しているので、幼児洗礼の時を『受洗・信仰告白の時』とすることでよしとしましょう」ということになりました。受洗日から今年で百年を経過したという訳です。平塚教会の原簿は、受洗・一九一八（大正7）年12月25日 関田寅之助牧師です。

幼少時に日曜学校で覚えた讃美歌、説教で何度も聞いた聖書の言葉、確かにこの事は、私の人生を導き、引揚げ、失業、転居など、変化の多い生活が続いた時も、希望を失わず、「全てのことには神様の導きがあるとの確信」がありました。夫の一誠が天に召されて、今年で24年、平塚に定住して52年経ちました。

今までの導きを、ほんとうに感謝し、これからのことも神様にお任せしています。

近詠 『いぶかしみ さぐる眼差しあたたかく 閉めたき雨戸 そのままにして』

《自分ではすらすら書けなくなつたので、聞き書きの形でまとめてもらいました。》



編集後祈

クリスマス礼拝の日に12月号をお届けします。中村義姉が100歳を超え、信仰生活が100年目になるということをお聞きし、平塚教会の誇りであり、今後このような記録は出ないであろうと思ひ、原稿をお願いしました。いつまでもお元気で、そして主の豊かな恵みと導きをお祈りいたします。

編集子